蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜか、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜか、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜ、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜか、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜか、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜ、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜか、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜ、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

蝶 流星に乗れば、一つの王国から別の王国へ。鳥の卵は一つの王国と、なぜか、その殻は真っ白。王国を覆い隠す巨大な影。城の中心で守られていた無邪気な姫は、やがて、騎士たちの背中を冷ややかに見つめていた。

千 年の春、ある王国の王妃が百人目の王子を産んだ。その日、王妃は、自分の誕生日に、城の小さな広場で、盛大な祝宴を開いた。

ありきたりの宴に飽きた貴族どもの最近の流行は、蝦蟇蛙のような声の歌姫。そのひどい歌声を嘲笑し愉しむ。彼女がこの声になったのは五歳のとき目の前で親を殺されてから。彼女がそれを語るのはいつか王の宴に招かれるとき。生まれ故郷を焼いた首謀者の喉を裂き、高らかに歌うのだ。

ずらりと魔導士が並ぶ前を、姫はゆっくりと歩き、末尾の小汚ない少年を指さした。皆が内心嘲った。王族は十歳で自分付の魔導士を選ぶ。妾腹の姫に、誰に力があり誰を選ぶべきか指示する人間はいなかった。後ろ楯のない末姫と野良猫のような魔導士の、密かな企みは、ここから始まる。

しとしと。雨が降っている。ずっと降り続いている。王国の民が空を見上げればその頬に額に冷たい水滴が降り落ちる。「気の済むまで降らせてやりなさい」酒場の女主人が言う。そうだな、と皆が頷く。雨の理由を知らない者はいない。一昨日、龍の連れ合いが亡くなったのだ。しとしと。

それはとても小さな王国でした。王様は毎日国民を怒鳴り罵り殴ります。王国が静かになるのは王様が外へ出勤している間だけ。その恐怖政治は国民であり奴隷でもあった姫様がクーデータを起こすまで続きました。家庭という王国内でしか威張れなかった父。娘は決して許しませんでした。

『私を人喰いと思ってたんでしょ』王国に飼われている妖獣が言う。餌で太る奴隷が憑依して怒る。『事実、私はこの国の敵軍の兵を幾度も喰ってきた。』妖獣の口元に米粒が付いている。小さなけがっ人を握り飯。『人間の王様の姫様』私自身、騙された。

龍 は訪し続けた。「あのっ国を捧げれば他は助けてやる」と言った。地上の国々は承諾した。「今、なぜ捧げれば他は」一家は承諾した。「弟を捧げれば他は」一家は承諾した。「あの村を捧げれば他は」小国は承諾した。「あの一家を捧げれば他は」村は承諾した。「子供を捧げれば他は」一家は承諾した。「弟を捧げれば他は」一家は承諾した。「弟を捧げれば他は」一家は承諾した。「弟